

縄文のビーナスの見どころ!!

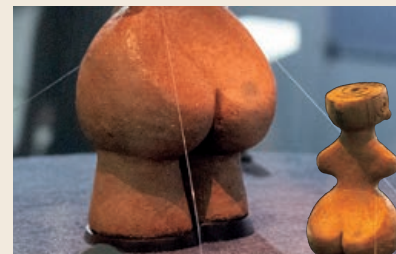
はっきりとした顔周りの表現

切れ長のつり上がった目、尖った鼻に針で刺したような小さな穴、小さなおちよぼ口。耳にはイヤリングをつけたかと思われる小さな穴が開けられています。



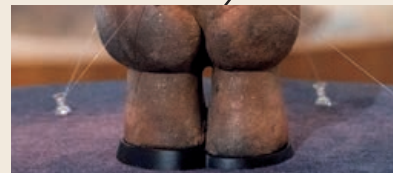
ラメのような輝き

表面に見られる金色に輝くようなラメの正体は雲母です。縄文時代には、この雲母を粘土に混ぜて土器や土偶を作る時期がありました。一方、同じ国宝の「仮面の女神」が作られた時期は、黒く焼き上げるのが主流でした。縄文時代にも流行があったのかもしれませんが。



お尻が出っ張った造形

下半身がしっかりしており、お尻が出っ張っている「でっじり」のプロポーションは、縄文時代中期に作られた土偶の特徴です。大きく張り出したお腹も合わせて、妊婦さんを模しているとされています。



左右で足の高さが違う!

足のパーツを作成する段階で、足の大きさが異なっていた可能性があります。縄文人もうっかりしてしまったのかもしれません。

文化財課 文化財係 / 吉村 璃来 さん

茅野市には、縄文時代の最初と最新の国宝があります!

市内に住んでいると国宝土偶2体がいることに慣れてしまっていますが、実は、全国的にも縄文時代の国宝は6件しかありません。その内2件も見つかっているのは茅野市だけです。ぜひ、尖石縄文考古館で生の土偶を見て、お気に入りのポイントを探してみてください!



CTスキャンの結果

諏訪中央病院でのCTスキャンの結果、左右の足、左右の腰、胴体、左右の腕、頭と頭の帯をパーツごとに作って、組み合わせる作り方だったと判明しました。しかし、この作り方を再現すると、空気が入りやすく、高温で焼いた際に、パーツが外れてしまう事が分かっています。縄文のビーナスの焼きが甘い理由は、焼き上げ時の破損を回避するためだったのかもしれません。

担当者からの一押しポイント!

～ひっそりと浮かぶ模様～

頭頂部の一箇所だけ、模様がなく空白に見える箇所がありますが、実はよく見ると下側にしずくの模様とそれを囲むような形で薄い彫り込みが描かれているんです。当時の人々の細部へのこだわりが感じられますね。



ビーナネットChino 茅野レガシー ～未来に残したい茅野遺産～ 「#32 縄文のビーナス」

先人が築き、現代まで守り受け継がれてきた「茅野市の素晴らしいもの」を紹介する『茅野レガシー』でもご紹介しています。



特集 Special Feature

縄文のビーナス

「縄文のビーナス」が国宝指定30周年を迎えました。縄文時代の出土品として最初に国宝指定された「縄文のビーナス」。この特集では、そんな「縄文のビーナス」の魅力について掘り下げていきます。

—「縄文のビーナス」のこれまで—

1988年	9月8日	「縄文のビーナス」出土
1989年	6月12日	「縄文のビーナス」重要文化財指定
1995年	6月15日	「縄文のビーナス」国宝指定
1998年	9月29日	日本文化館(フランス パリ)「縄文展」
2000年	3月25日	東京国立博物館「日本国宝展」
2009年	9月10日	文化庁海外展 大英博物館「THE POWER OF DOGU」
2014年	11月21日	東京国立博物館「日本国宝展 祈り、信じる力」
2018年	7月3日	東京国立博物館「縄文展」
	10月17日	文化庁海外展 パリ日本文化会館「Japonismes2018」縄文展
2025年		「縄文のビーナス」 国宝指定30周年

※主要な項目のみを掲載

「縄文のビーナス」の特徴

「縄文のビーナス」は、高さ27cm、重さ2・14kgで、頭部にのみ、渦巻文などの文様が見られます。顔は切れ長のつり上がった目、尖った鼻と小さな穴、おちよぼ口をしているのが特徴的で、縄文時代中期の中部・関東圏の土偶が持つ代表的な顔を表わしています。また、お腹とお尻は大きく張り出しており、妊娠した女性の様子をよく表しています。焼きは一部甘いところがあり、右足には表面がはがれ落ちていた箇所がありました。一般に見られる壊



出土当時の「縄文のビーナス」

「縄文のビーナス」の出土

「縄文のビーナス」は、昭和61年(1986年)9月8日、茅野市米沢地区の棚畑遺跡から出土しました。縄文時代の集落は、何軒かの家がお祭りやお墓などに使う広場を中心にして環状に作られますが、この土偶は集落(遺跡)の中央の小さな穴の中に、ほぼ完全な形で横たわっているように埋まっていた。

された土偶とは異なり、完全な形で埋められたものであることは明らかです。

国宝指定の理由

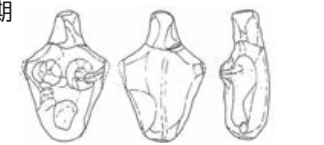
縄文のビーナスが国宝に指定された大きな理由は、その出土状況と学術的価値にあります。

縄文時代の土偶は、有名な物でも出土状況が不明なことで、国宝に指定されていないものもあります。また、縄文時代の初期に作られた土偶は、平面的で自立せず、小型で顔の表現もほとんどない素朴なものが中心でした。

これらに対して、縄文のビーナスは土偶づくりが大きく変化した中期前半に作られた土偶で、立派な足によって自立し、立体的で大型化し、顔の表現も備えるなど、土偶づくりの転換点を象徴しています。さらに、集落の中央という公共性の高い場所から完全な形で出土したことも特筆すべき点でした。

造形の進化を示す姿と、明確な出土状況の両方を兼ね備えていたことから、縄文時代の土偶として最初に国宝へと指定されました。

1 草創期



出土場所：三重県・粥見井尻遺跡

2 前期



出土場所：愛知県・大曲輪貝塚

縄文時代初期(草創期～前期)の土偶